

書評

石井香江 著『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか
—技術とジェンダーの日独比較社会史』
(ミネルヴァ書房, 2018年)

金井 郁*

I はじめに

電話交換手には女性が多く、電信技士には男性が多いということは日独共通する特徴である。本書は、「電信電話のジェンダー化」のプロセスを複数のアクターが行為した〈場〉と時代背景に着目しながら検証し、日独の比較を通じて、頑なに(標準的な)女性身体と女性性、(標準的な)男性身体と男性性を結びつけて「自然化」するジェンダーによる権力関係のあらゆる装置を丹念に浮き彫りにした大著である。

電話交換手に女性が多い理由として、しばしば女性は家計補助的な低賃金労働者という事実のほかに、①男性より高い女性の声聞き取りやすいばかりでなく、女性の動きは緻密で加入者に対する対応も丁寧である、②新しい技術である電話の導入で女性による操作も可能となった、③女性は従順で管理が容易であった (p.6) など、あたかも(標準的な)女性身体と女性性を結びつけて「自然化」された理解がなされてきた。しかし、そこにはある特定の労働や技術を特定の性別に配分し、人々が自然なものとして自明視する装置がある。本書は、日独の政治、社会、職場、家庭、教育といった背景を丹念に考察して、電信電話という職業をめぐる、さまざまな場で機能しているジェンダーによる権力装置を明らかにする射程の広い研究となっている。そして日独の歴史を比較する手法により、ジェンダーの意味が社会的・政治的文脈によって常に変化し、身体とジェンダーの間

係も固定的ではなく、こうしたジェンダー分析が労働の場で女性を排除するメカニズムを明らかにする鍵となる(申, 2020)ことをはっきりと読者に示すことに成功している。

本書は、19世紀後半から戦間期までを検討対象とし、3部から構成されている。第1部『『男の仕事/女の仕事』の誕生』では19世紀半ばから世紀転換期までに、日独で電信業務が「男性化」し、電話交換業務が「女性化」する前史と経緯を市民層と士族の家族を取り囲む社会的状況、女性が社会で担う役割の変化を、女子教育・雇用の動きと関連させて検討する。第2部『『男の仕事/女の仕事』の定着』では、世紀転換期から両大戦間期までに、電信業務の「男性化」と電話交換業務の「女性化」という「性別職務分離」が定着し、さらに強化される過程を論じる。第3部『職業病とジェンダー』では、電話交換手にみられた神経症という病と労災給付をめぐる、医学・産業心理学といった科学的な知がいかに構築されジェンダー化されたのかを論じる。客観的とされる医学的なく知<で>さえ、ある社会的・政治的文脈の中で特定の意味を付与されうる (p.293) ことを電話交換手と労災の事例から歴史的に検討したこの章は、今日の労災研究にも大きな示唆を与える。以下、各部を概観した上で、本書の意義、示唆される点、論点についていくつか述べる。

II 本書の内容紹介

第1部で明らかになったのは、電信に続く情報

* 埼玉大学人文社会科学部 教授

通信技術として電話が普及するに伴い、電話交換手となる女性の数が日独両国で増加し、女性の職域拡大につながるといった単純な技術決定論的な見方に対しての異議である。ドイツでは民間の女性組織が、短期的には中・下級の市民層の娘たちが生活の糧を得て家族を支えるため、中長期的には未婚女性の経済的自立という女性解放運動の観点から、陳情書を通して世論や政界に働きかけ、女性の職業訓練の機会を提供して就労支援をしたという事実を明らかにする。また、帝国郵便初代長官は、既存の郵便事業の存在を意識して、差異化を図るためにサービス向上と同時に人件費の抑制を迫られたことや、男性従業員の家族を雇用するという福祉的意図で市民層の女性採用に積極的姿勢をみせたことを丹念な資料調査から掘り起こす。日本では、明治維新で特権を失った士族の娘たちが、郵便局長となった父親の仕事を補助したり、家計を補助するという名目から官業で働き始めた。さらに、外国の事例を見聞した開明的な男性知識人が、「文明国家」の指標でもあった女性労働を推進する観点や、サービス向上や人件費の抑制という理由で、女性労働に否定的な旧来のジェンダー規範に異を唱え、女性が働くことを可能とした。一方の男性化した電信技手については、日本と比べて電話事業の開始が早かったドイツ帝国では、体力を要する単式交換機が使用され、1887年に単式交換機が複式交換機に切り替わった。しかし、それでも電信技手には当初男性が多かった。この理由には、もともと電信が軍事的な目的で兵士に使用されていたことや、電信技手を養成する学校に女性の入学が許可されないこと、文民官吏候補軍人を優先して雇用する制度の存在を挙げる。このように、人事政策の決定に影響力を有したアクターとして、管轄官庁やそのトップのみならず、議会やメディアでの議論、外国からの見聞、女性にかかわる組織の活動、20世紀にはじまる女性官吏の組織化など性別や社会的出自を異にする集団間の複雑な力学が作用している。

日独両国で、当初は電信業務と電話交換業務の双方をリテラシーの高い社会階層の男女が担当していたが、世紀転換期には特に都市部の大中規模

の局で、電信業務は「男の仕事」、電話交換業務は「女の仕事」という性別職務分離が形成されるようになる。第2部では、世紀転換期から両大戦間期までに、電信業務の「男性化」と電話交換業務の「女性化」という性別職務分離が確立し、強化される過程を論じる。ドイツでは第一次世界大戦前から女性の職域として確立しつつあった電話交換業務に対しては、より一層「女性職」であるという意味が付与され、女性職に配置される男性は復員兵や家族を扶養する義務のある男性に限定された。これは戦前のジェンダー秩序が変化していないのではなく、女性と男性の「適性」を明確に区分する、新たな布置のなかに再編されたことを意味している (p.182)。例えば「適材適所」をモットーとする産業心理学の知見を活かした適性検査が実施されると、男女間の差異や男女の持つ「特性」、そこから引き出される「適性」に、よりいっそう光が当てられることになったという。経営側が用いる「適性」という語は、こうした新しい「科学」の下支えを受けて登場した言説でもあった (p.182) とする指摘は、後の労災をめぐる科学的な「知」が社会的に構築されるだけでなく、それがジェンダー化を推し進める装置となる過程と重なり、大変興味深い。

また、戦間期には日独両国で「モダンガール」や「職業婦人」とのかかわりで、とりわけ家庭や男女関係、この2つから派生する「風紀と道徳」「貞操」などの性規範に注目が集まるようになった。この事実の発見も、セクシュアリティがいかにか労働現場から女性を排除したり特定の女性を包摂したりする装置となるのかを示している。電話交換手の事例では、厳格な性規範を自らに課し、それが職業の威信を高めることにもつながっていたと同時に、この規範から逸脱する存在に排他的な側面を持っていたことは内部の反発も引き、また「女性性」の重視が男性と差異化される領域に自らも囲い込むことになりえたことを指摘する。

新技術がいち早く導入された電話交換業務では、「神経症」が頻発していた。第3部では、この「神経症」に付与される意味が、世紀転換期を境に変遷した経緯、その政治的・社会的文脈を明らか

にしている。ドイツでは、専門家である医師が1889年に『外傷性神経症』という著書を発表したのを機に、帝国社会保険局は「外傷性神経症」の存在を認知し、労災としての保険給付を認めた。その後この病は1926年に労災保険法の中から消滅するまで、ドイツ社会に広まり、専門医のみならず法律家や雇用主の間でこの病気の認識と対処をめぐって議論の焦点となった (p.262)。電話交換手についてみると、何らかのきっかけで感電しこれが原因で発病したとされる職員は、従業員に女性が多かったため、女性に集中した。そのため、労災によって引き起こされた「神経症」が、すでに女性特有の病としてジェンダー化されていた「ヒステリー」と同一視されるようになったという (p.266)。さらに、労災保険の対象であった職場における「外傷性神経症」患者が増大すると、その補償を抑止するために、「年金神経症(労災申請して、年金を受給して‘楽をして’生活するための詐病)」や「労働忌避」といったスティグマが社会的に付与されるようになる。また、第一次世界大戦の中で、ヒステリーに似た症状を見せる兵士を「男性ヒステリー」と呼び、命を賭して故国のために勇敢に戦うべき男性が神経症になるとはまるで「女のよう」であるとか、兵役を逃れて年金給付を受けたいがための「詐病」であると非難されるようになった。このように第一次世界大戦を境に、「神経症」の原因が「意志」「欲望」と強く結びつけられるに伴い、医師が労働者階級の患者を教育・統制する役割を担うようになったことを明らかにする (p.281)。このことは、近代の産業システムに適合する形に労働者の生活を秩序付け、組織化すること、さらには、神経が脆弱な存在として女性を周辺化する一方で、女性とは差異化された「強い」男性を故国のために命をとって戦う兵士として動員することを含意していると指摘する。

また第一次世界大戦は、心理学の応用の実践範囲を拡大しその「技術化」を促進することとなった。戦争で弱体化したドイツ経済の再建を図る組織的な努力として、「合理化運動」は国民的運動という形で全国家・全産業的な規模で取り組まれた

(p.282)。その際ドイツでは、人間的・文化的要素をテイラー・システムに組み入れようとした点に独自性があり (p.284)、労働力を文化的存在であると認識し、労働者の健康や仕事への満足感に着目するようになったという。その結果として、労働衛生思想が広まり体操が職場に導入される。労働衛生思想の広まりの中で、模範的な身体が前景化されると、職員の身体の変調や疲労は、仕事の内容とは無関係に、個々人の持って生まれた性格・体質のみならず、自己管理の不徹底として理解されるようになる (p.288)。そして「神経の弱さ」や「自己管理能力の欠如」という症状は、女性の特有なものとしてジェンダー化された。患者の7割以上が男性であったにもかかわらず、社会国家の負の側面、すなわち社会福祉制度への依存・濫用、そして「怠惰」の象徴でもあった「年金神経症」は、女性特有の「ヒステリックな不節制」と関連付けられ (p.289) 認識されたのである。労災保険の受給者集団の範囲や規模をさまざまなく知に依拠しながら制度的に確定する過程で、受給者として適した集団と不適切な集団を分節化する「包摂と排除」のメカニズムが、戦間期により強力に作動 (p.290) したことを明らかにした。

III 「自然化」したジェンダーによる権力関係のあらゆる装置

本書の研究からは、教育、政治、企業、セクシュアリティ、戦争、家庭、専門的な知など非常にさまざまな場で、ある特定の労働や技術を特定の性別に配分し、人々が自然なものとして自明化する装置が作用していることが明らかとなった。我々はそうした権力装置を一つずつ地道に明らかにする研究を積み重ねていくことが必要といえる。そうしなければ、例えばスキルの解釈をめぐるジェンダー格差を見落とすことにつながる。本書を読むと、電話交換作業は8つの手順が必要で、単純作業であるという一般の認識と異なり特に集中力を要するせわしい仕事であった (p.73) という。にもかかわらず、女性が多かった電話交換手のスキ

ルは女性の特性以外で注目されてこなかった。一方、電信技手については、モールス通信にみられるように、スキルの難しさや判断力が強調される。このように、誰が労働を担うのかによって、その仕事で強調されたり注目されるスキルが異なるのである。これは、評者が研究している生命保険営業職をみるとよりはっきりとあらわれる。生命保険営業職では、日本に戦前からある伝統的生命保険会社では女性の営業職が9割以上を占め、1980年代以降に日本で展開する外資系生命保険会社では男性の営業職が9割以上を占め、ジェンダー化されている。どちらも同じ生命保険営業を行い、見込み客を発見することが重視される仕事であるにもかかわらず、伝統的生命保険会社のいわゆる「生保レディ」は誰でも出来る易しい仕事とされ、外資系生命保険会社の高学歴男性が担うと、プロフェッショナルな仕事と価値づけられる(金井, 2015; 金井・申, 2019)。なぜこのようなことが起こるのか、「自然化」されたジェンダーによる権力関係の装置を一つずつ丹念に明らかにしなければ、あたかも能力やスキル自体にジェンダー格差があるよう解釈されてしまうことにつながる。

Ⅳ 若干の論点

若干の論点として、比較による日独の相違点・類似点から何が明らかになるのかということを目指したい。著者の言うように、従来一国の職業だけ研究しては気づかれなかった点、例えば日本では戦後までモールス電信機が使用されその

「技能」を尊ぶ職場文化が発展したこと、ドイツでは男性組織から排除された女性電話交換手の組織化が進み「ドイツ帝国女性郵便・電信官吏同盟」が女性電話交換手の労働条件や福利厚生、職業的威信などをめぐるアクターとして機能した一方、日本にはそのような組織はなかったものの通信協会雑誌の「女性の声」欄の分析から女性自身が状況を改善させようとする意識が皆無ではなかったこと、ドイツでのみ電話交換手の神経症が労災との関係から注目されていたことなどが明らかになった。しかし、これだけ壮大な社会史的比較をしたのだから、電信電話のジェンダー化における日独の相違点・類似点について意義づけを行い、ジェンダー秩序の生成と再生産において日本とドイツを比較する意味を明確化して欲しかったと考える。

とはいえ、本書は上述のように研究の射程が広く、さまざまな分野での知見を得ることが出来て、知的好奇心が刺激される本であった。

引用文献

- 金井 郁 (2015) 「なぜ女性の仕事は易しいと評価されるのか：生命保険営業職の位置づけをめぐって」『家計経済研究』107号, pp.26-35。
金井郁・申琪榮 (2019) 「ジェンダー化された雇用・営業戦略と顧客ケア—外資系生命保険会社と伝統的生命保険会社の比較研究」社会政策学会フルペーパー(高知県立大学)。
申 琪榮 (2020) 「書評『女性のいない民主主義』(前田健太郎, 岩波書店, 2019年)」『年報政治学』2020年度第1号。

(かない・かおる)